2020 年度　総合科学研究科総合文化学専攻修士論文要旨

論題「シベリア出兵における非戦反戦―言論人の言説分析を中心に―」

地域文化リノベーションプログラム

金野　文彦

学籍番号　G0218005

シベリア出兵は、第一次世界大戦終期と絡み合いながら、1918 年に「チェコスロバキア軍の救出」を口実に、日米英仏加などの連合軍が極東シベリアを中心に軍隊を派遣し、現地の白軍と呼ばれる反ソヴィエト政権の勢力を軍事的に支援した干渉戦争である。米英などの諸軍は早期に撤退した。ソヴィエト政権は、ヨーロッパ・ロシアで内戦と英などの干渉軍を打ち破った。極東シベリア方面の干渉軍に対して、1920 年にロシア共産党はじめとする諸勢力を糾合して、極東共和国が創建された。しかし、日本軍は同年のニコライエフスク事件を口実に、北樺太（サハリン）などへ戦線を拡大した。各地の戦闘での敗退と日本国内でのシベリア出兵反対論の広がりで、1922 年 10 月 25 日にウラジオストクから日本軍は撤兵した。だが、依然として北樺太には軍の駐留を継続し、シベリア出兵は継続した。

本報告では、従来は集中的に取り上げられてきたシベリア出兵開始前の言論人らの反対論より、重点を出兵開始後から終結までの言論人の言説を検討してきた。また、朝鮮の三・一独立運動や中国の五･四運動､日本の米騒動などの民族運動や民衆運動とシベリア出兵との関連や、日本国内外の社会主義運動と反戦論を強調した研究も社会運動史の側から積み上げられてきた。大正デモクラシーとの関連で、吉野作造や石橋湛山などの自由主義者のシベリア出兵の非戦論や反戦論の研究もなされてきた。

私の研究は、従来社会運動史研究を進めてきたが、本報告では、大正デモクラシーの主導者

である自由主義者の非戦論・反戦論を論じた。

第一人者の吉野作造、石橋湛山、中野正剛について言説を検討し論じた。そして、吉野作造の関わってきた雑誌『新人』を閲読していくうちに、その発行元の東京弓ノ町教会に参集していった東京帝大の学生たちが、シベリア出兵について非戦論・反戦論を展開していったことに着目し、特に今中次麿らのシベリア出兵論を検討した。

各言論人のシベリア出兵についての言説は、途切れなく終結の 1925 年まで発表されていたわけではなかった。吉野・石橋・今中・中野の代表的論文や時評について論じ、時期的にはシベリア出兵開始の 1918 年から終結の 25 年までをカバーするように、それを配列した。

各人のシベリア出兵への非戦論・反戦論は、一様ではない。吉野作造については、初期は出兵容認論ともいえるような言説であったが、かなり強い戦争批判へと転じていった。また、石橋は、シベリア出兵批判は一貫しているが、1922 年の日本軍のウラジオストクからの撤兵以降は、論評はかなり少なくなっていった。

今中次麿ら『新人』の同人は、若き感性からするシベリア出兵批判を展開していった。東京帝大卒業後に就職などにより、東京を離れたためか、『新人』誌上での時評などからは離れていき批判論を論じることはなくなっていった。

シベリア出兵について、一貫として批判論を展開していったのは中野正剛であった。中野自身が発行に携わった『東方時論』を舞台に、さらには衆議院議員として帝国議会の演壇で政府に向ってシベリア出兵反対を主張した。

シベリア出兵については、キリスト者や自由主義者が総合雑誌などで、果敢にその非戦論反戦論を政府に向けて主張していった。これが戦争終結へ導いた有力な力の一つであったと言えるだろう。